

## G-7 看護に対する主婦ならびに学生の意識調査 (オ2報)

中村学園短大家政 松崎ナツ 九州大医療技術短大看護 ○鶴コトミ

目的 家族の健康管理にあたる主婦にとって、看護の知識・技術を身につけることは極めて重要で、看護を習得した女性が多くなることは、社会にとっても望ましいことである。家庭看護学指導上の参考資料とするため、昨年にひきつづき主婦および学生について、看護に対する意識と実態を把握したいと考え、この調査を実施した。

方法 主婦を対象とする調査は、昭和48年10月から11月にかけて、福岡県を中心とする九州全域の390名に、アンケート用紙を配布し、その結果を集計した。学生については前年と同じく、福岡市内の二つの短大を対象に、看護学を履習した376名と履習しない319名について調査した。

結果 主婦が看護教育を受けた時期は、年令・学歴により多少の差はあるが、高女卒の100%は高女で学習しており、その程度は充分勉強できたと答えたものが59%であった。看護学習については、97.3%の主婦が絶対に必要であると解答し、その内容は救急法・一般看護の順で、適切な時期は高等学校と答えたものが過半数をしめている。高血圧、がんなどの検診状況や医療施設の利用、各家庭で体験した看護の実際、常備薬の状況なども把握することができた。短大学生について家庭看護学を履習したものと履習しないものとの間には、その意識にかなりの差違が認められ、看護を勉強してよかった体験者が3倍にも達している。なお履習者の自己評価と成績との関連などについても考察し、女子教育の立場から看護教育の重要性を強調したいと思う。